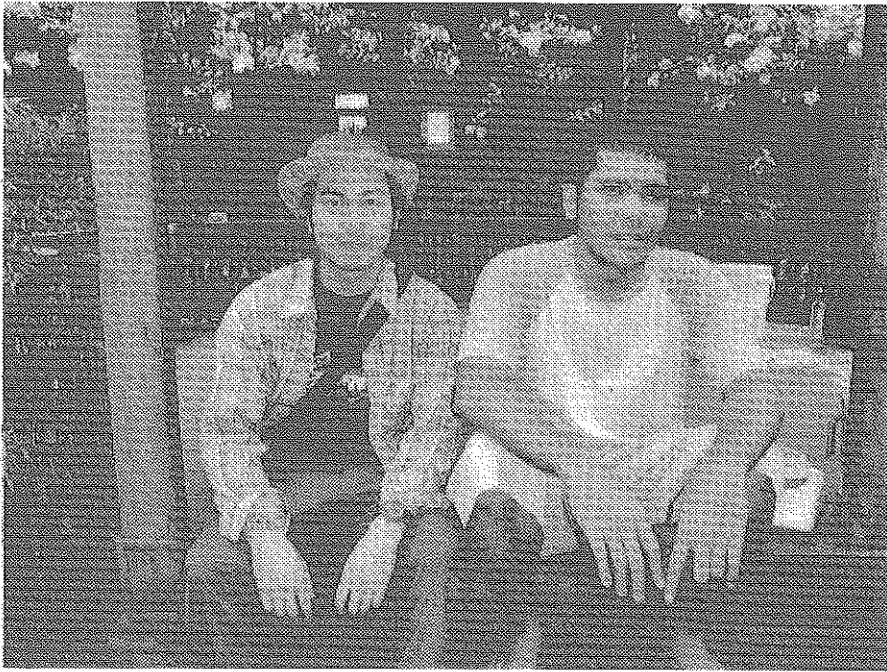


Save The Tropical Forests



森の通信

2009.10.13



▲ Yoyorinのトグ・シモヌキア氏と石崎(中カリマンタンで)

CONTENTS

- 3P..... people⑫ アルビ・バレン4ヌス氏
- 4P..... 「広がる野焼き火災」インドネシア
- 5P..... 中央カリマンタン・ブランタカン地域を訪ねて・尾崎ゆか
- 7P..... インドネシアからの違法材を追う⑥ 「Sabah 違法材貿易続く」
- 9P..... バスキとアブラヤシプランテーション・石崎広雄一郎
- 14P..... 世界の森林ニュース

NEXT

## 【政権交代—CO2削減25%と掲げる言葉】

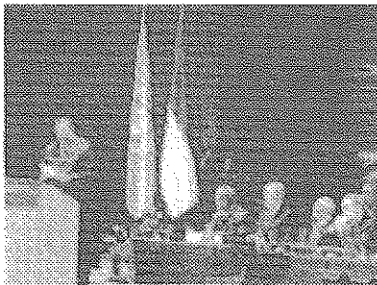
政治家の言葉が未来を切り開くなんて大統領選挙もない日本では困難かここ何年かの首相の言葉や行動に愛想をつかして諦めかけていたが鳩山氏の言葉に驚いた。亡き母は常々語った。言葉を大事に。言葉の前の念からきれいに。念からきれいな言葉は未来を創る。久しぶりに未来的な政治家の言葉を聞いたように思った。宇宙から応援があるような言葉である。多くの業界からは反発の声もあった。しかし、代替エネルギー業界など歓迎する声もある。歓迎する声に耳を傾けたい。

政権交代は国を変える。環境を守るのは地道な環境保護活動でもあるが、劇的な変容をもたらすものは政治である。インドネシアでは違法伐採が止まった。マフィアが跋扈していたあの森で。それは7年前に賄賂横行のスハルト政権からユドヨノ政権に変わり、癒着体質を切り、違法伐採を摘発、環境活動家トグ・マヌルン (Togu Manurung) 氏を林業大臣の相談役に迎えた。インドネシア NGOs や私たちウータンの国際NGOと協力して森林保護に取り組む。

タンジュン・プテイン国立公園では森に静けさが戻り、川が澄み始め、オラン・ウータンが帰り、Friend of National Parks Foundation の働きかけで、伐採に従事していた人々が植林に参加し始めた。

未来を開く言葉を紡ぐ政治家を選び続けることを怠ってはいけない。 (奥村知亜子)

(左/2007年温暖化防止 Bali 会議でユドヨノ大統領 右/日本政府の違法伐採対策の進捗)



- ・ 2002年のG8サミットより、日本政府は違法伐採問題と戦うコミットメントを度々採択
  - 「違法に伐採された木材は使用しない」林野庁 (2005/3/31)
  - 政府は、国際組織や生産国に財政的支援
- ・ 政府調達改正前には、業界の取り組みは
  - 対象115社の12%が調達木材の合法性確認 (全本連の調査)

## 【ウータン活動報告】

2009・6・9 ウータン、ラミン調査会は都道府県、政令指定都市に「合法材の推進と原生林材の使用削減について」の質問を送付。

6・30 ウータン「通信ウータン92号」発行

7・12,13 ウータン、未回答自治体に「合法材の推進と原生林材の使用削減について」を再送。

8・2 ウータン、未回答自治体に「合法材の推進と原生林材の使用削減について」を再送。

8・22 ウータン、未回答自治体に「合法材の推進と原生林材の使用削減について」を再送、

9・10 「合法材の推進と原生林材の使用削減について」回答が8割に。

## People 12 save! the World's Forests

アルビ・バレンチヌス——Telapak の Yayat, Hapsoro、アルビ氏からの提案で  
日本での密輸材ラミンの使用停止キャンペーンが成功となった!! ありがとう。



2009年3月 Arbi(アルビ)氏らとウリン材調査・・・東京の新木場・貿易埠頭にて

ラミン材停止キャンペーンで大きな成果をあげた。2003年11月招聘の時、違法伐採でスマトラ島で250名死傷の大惨事が発生。アルビとヤヤット氏は、「日本でラミン材使用のキャンペーンを頼みたい」と。それから本格的に使用停止キャンペーンを始めた。日本でラマダンを行い、日が沈み、やっとなんと水とたこ焼きを口にした。「おいしい。」彼らは密輸材調査にあたり、ある時は運転手、ある時は木材マフィアシンジケートの聞き取り、時には港湾、税関で張込み等の大活躍。違法伐採停止も進み出し、森林保全もインドネシアで始まり、彼は、Telapak 森林保全コーディネータから今オランウータンの保全(オランウータン・コンサベーション・サービス・プログラム)の行動をしている。「今日は少し寒い、風邪ひいてしまった。帰国したら、また森林保全を進めたい」と。山と森が大好きな青年だ。

(文・写真/Nishioka)

緊急お願いのキャンペーン FNNPが消火活動～西岡が現地へ  
この11月東京・大阪に招く中カリマンタン・タンジュンパティン国立公園でボランティア  
が種める森作りをする Friend of National Parks Foundationのメンバーも野焼きから  
同公園に火が飛び、消火活動！「救援基金を！」～キャンペーンお願いです

# 広がる野焼き火災

## インドネシア 煙で健康被害

インドネシアで、野焼きが原因の大規模火災が広がっている。最も深刻なスマトラ島リャウ州では7月、昨年同月の6倍以上の火災が発生。住民の健康被害や温暖化への影響が懸念されている。隣国マレーシアにも煙害が及んでおり、関係国は危機感を強めている。

（インドラギリ・フルヘインドネシア・スマトラ島）  
■矢野英基、クアラルンプール■塚本和人

## 隣国にも影響

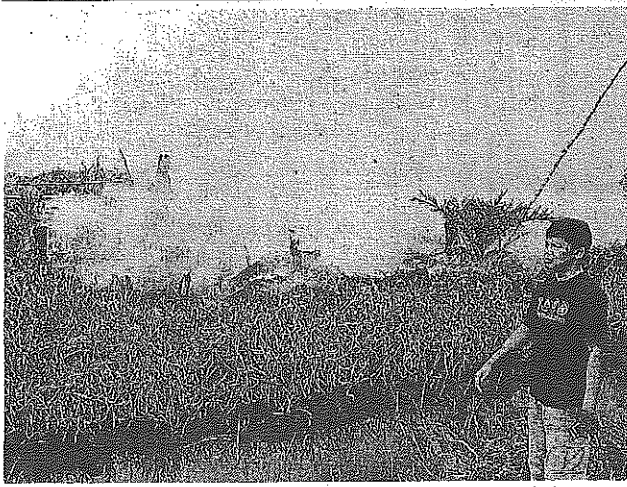
同島中部リアウ州インドラギリ・フル。倒木や草が数百斤にわたって煙に包まれ、炎が風下に向かって走る。植物が堆積した地中の「泥炭層」も静かに燃えていた。周囲なのに境界は数十センチ。目やのどが痛い。近くの農家のヘルマさん(35)は「一夜に突然、燃えだした。誰かが放火し広がつたのだろう。火が自宅の方に向かっていて心配だ」。



例年、乾期の6～9月に野焼きの延焼による森林や泥炭地の火災が起きるが、今年は7月から急増している。NGOの世界自然保護基金(WWF)によると、リアウ州での7月の発生件数は、昨年(約370件)の6・5倍の約2

400件。8月に入っても、スマトラ島やカリマンタン(ボルネオ島)の数百カ所以上で発生している。

リアウ州政府によると、火災の煙害で、のどの痛みやせきを訴えて病院を訪れる人も



野焼きによる延焼で草や倒木が焼ける様子を心配そうにながめる住民＝インドネシア・リアウ州、矢野写す

多く、7月は州内で数千人が治療を受けた。

インドネシアでは土を肥やしたり害虫を駆除したりするため野焼きをする伝統が古くからあり、99年に法律で禁止したが一向に減らない。今年の火災は、アブラヤシ農園やアカシア植林地などで目立つ。

雨が少なく、07～08年に警察が強化した取り締まりが一段落したことなどが急増の原因とみられる。農園を運営する企業側が土地を耕すコストを安くあげるために野焼きをし、被害を広げている疑いが

強まり、政府も調査に乗り出した。

ただ、一概に禁止できない事情もある。ウイトゥラル環状相は「野焼きは農民が耕地を開墾する手段でもある。禁止措置をゆとりと実行している」と難しさを訴えた。

煙害は隣国マレーシアにも及ぶ。5日にはクアラルンプールなど6カ所でも空気の汚染が今年最悪レベルに達した。マレーシアでは、新型インフルエンザ感染者の死者が7月から増加し、リウ保健相は「煙害が呼吸器系疾患患者に影響し、新型インフル感染が加わると肺炎で死に至る可能性もある」と懸念する。

今年には異常気象をもたらす「エルニーニョ」のため、東南アジア南部では大気が乾燥して乾期が長引くと予想されており、火災規模と煙害は00年以降で最悪だった06年に近い状況になる可能性もある。また、泥炭層に延焼すると、大量の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)が放出され、地球温暖化にも大きな影響を与える。

シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイ、ブルネイの環境担当閣僚らは19日、緊急協議し、野焼き禁止徹底や、緊急消火活動での協力を進めることで合意した。

## ～中央カリマンタン、ベランチカン地域を訪ねて～

2009年7月

尾崎ゆか

インドネシア、中央カリマンタンの町バンカランプンから北西に車で6時間、舟で4時間かかるベランチカン地域を訪ねた。

ベランチカンの森に野生のオランウータン約6000頭が生息する、と現地NGOのYAYORINが2003年に報告している。ウリンやメランティなど地域の人達が大切に利用する希少樹木が残る森林地帯で、ギボンやオナガザル、野牛など40種以上の哺乳類、207種以上の鳥類も調査で確認されている。

木材輸入国の懸念が高まり、2005年にはインドネシア政府による違法伐採対策が強化された成果でこの地域の伐採量は激減したものの、伐採許可の取得はまだまだ可能となっており、完全な保護地とはなっていない。数年前までは伐採キャンプ地が多くあったらしいが、今は許可を得た3箇所が操業しているという。伐採された材はコリンドー(Korindo)社の工場へ納入されているらしい。売るための大木を選んで伐採する択伐が行われており、地帯一面を壊滅するような皆伐がなされている。多様な生態系にダメージはある。

この伐採許可は2012年で期限切れとなる。しかし、この地域に関わるNGOは、この許可の期限切れを手放しで喜ぶことはできないと、許可を得た伐採地だと厳しい監視下で伐採が行われるものの、期限切れとなって伐採事業が撤退すれば、監視の手は薄れ、再びやりたい放題の違法伐採がぶり返すか、アブラヤシ・プランテーション拡大の手が及ぶ懸念がある。

この豊かな森林地帯に流れるベランチカン川の上流には、10以上の村落が点在し、村と村の行き来にはエンジン付き小舟で移動する。訪ねた村のひとつは12世帯という小さな村で、舗装された500m程の道路が一本あるだけ。これから商店を始めるという一家が、丈夫で重いウリン材を利用して家を建てていた。これまでは、ジュースもキャンディーもタバコも、舟で30分の隣村へ行かないと手に入らない村だった。逆に言えば、商品がなくても現金がなくても暮らしてはいた村だった。食料を求め、森を数時間歩いて寝泊りし、野牛や鹿などを狩猟する。子供達は、夜でも月の光を頼りに自ら舟を漕ぎ、ヤリを使って魚を射止める。雨上がりの朝には、女性達がキノコ、タケノコを採りに出かける。そうした暮らしを維持しつつも、この一帯の村の男性達は、数年前まで近くのキャンプ地で木材伐採業に従事していた人が多い。

ネブー(仮名)は、12歳で両親を亡くして以来、自分で暮らしていくために伐採キャンプ地で働き出し、木材を切り出す重労働をこなしてきた。22歳になった今では、セメント袋を担いで長い坂道を登ることも容易なことだ、と語る。

「つい最近までは、遠く森の奥にある伐採キャンプ地の明かりのランプが灯って、この坂道の上から綺麗に見えたんだ。」と、村と森が一望できる丘に連れて来てくれた。その日はもう、キャンプ地の灯火はひとつも見えなかった。違法伐採の取締りが強化され、以前はあちこちに在った伐採キャンプ地も閉鎖したという。

「(伐採キャンプ地は)自分も十代の頃に働いていた場所なんだ。そこで力仕事には慣れっこになった。」

ネブーは今、海外NGOの支援金で行われる農業技術指導の仕事のアシスタントで収入を得て暮らす。貯めてきたお金で、生まれた村に自分の家を建てることを計画 중이다。

8歳と4歳の二人の息子がいる28歳のジョシー(仮名)も、数年前まで伐採業を仕事にしていた。いつもいづれ森の奥を歩き、大木を切り出す仕事をしてきたから、オランウータンが棲む森を熟知している。

「野生のオランウータンを見たことある？」と尋ねたら、「何度もあるよ」と当たり前のように答えるジョシー。  
「10回くらい？」「もっとだよ。」  
「50回くらい？」「もっと」「100回くらい!？」  
「んー、多分それくらい見たかも。野生のオランウータンを見たいなら、数時間森を歩くだけでは見れない

よ。何週間も森の中にいないと見れない」と、この森の広さを語ってくれた。

ジョシーには、森のナイトウォークに連れて行ってもらった。途中、伐採されたものの置き去りにされた何本もの大木や、小川の橋代わりとして横たわる巨木を目にした。最近まで伐採が盛んだった様子が残っていた。

何匹ものヒルや蚊に見舞われながら2~3時間程歩き続けたものの、出会えたのは小鹿の夫婦だけ。湧き水を求めて希少種の野牛がやって来るという場所で一晩過ごしたが、遠くで声が聞こえるだけで、野生動物は何も現れなかった。この地域で4年以上野鳥調査を行った、wl 卜いる調査員のリー(仮名)でも、野生のオランウータンには未だ出会ったことがないという。おいしい木の実や果物が豊富になる森のもっと奥で、ひっそり暮らしているのだろうか。

今は、海外NGOの資金で行われる野生生物調査の仕事に就くジョシーに、「森の木を切り出す仕事は、どうしてやめたの？」と尋ねたら、「出来なくなったんだ。もう、やってはいけないことになったんだ」と言った。

違法伐採の取り締まりは、こうした村の人たちにも浸透し、変化をもたらしていた。

ネプーやジョシーのように、これまで伐採業に従事していた村の人々が新たな仕事を得られるのは、ほんの一握りに過ぎない。今、村々では、新たな収入源を目指して動き出している。村の人達が共同で材を切り出し、手作業で舟を作って他地域へ売る仕事や、町で売れる商品作物の栽培などが試みられていた。違法伐採が停止したとしても、この地の人々の森との暮らしは勿論続く。

中央カリマンタンでは、確かに取締りが進み、伐採は激減しているようだった。道中も「STOP! 違法伐採」の看板がみられ、インドネシア政府の真剣さも伝わってきた。

けれども、その道中に延々と続くアブラヤシ・プランテーションの規模は想像を超えていた。車の中で1~2時間居眠りして目が覚めても、まだまだアブラヤシ・プランテーションを横目に走っていく。どこまでも続くアブラヤシ農園。そのプランテーションの面積分、天然林が失われてきたと言えるのだろう。そのプランテーションの拡大の波は、野生のオランウータンの生息地ベランチカンの森のすぐそこまで来ている。

空港があるパンカランプンの町の安宿に滞在中、アブラヤシ関連の仕事をするインドネシア人が何人も話しかけてきた。「アブラヤシ育成に良く効く肥料の販売をしている。日本人は買わないか？」とか「アブラヤシの買い付けの仕事にやってきた。ジャワ島から毎週やって来る。中東へ売るためのものだ。」とか。

ベランチカンの村の60歳近いジュマおじさん(仮名)は、ダヤック族の伝統信仰を通し続け、共通語のインドネシア語を拒み続け、生まれ育った村の言葉だけを話し、30年以上前に大木で作られた手漕ぎの舟を使って森へ行き、誰よりも森と密着した暮らしを続ける。世界が目まぐるしく変化していることは分かっているけれど、森の破壊に繋がることは受け入れられない、という。そして、自分が生きている間に、(伐採や鉱山開発などで)森の全てが失われてしまう可能性があることを今最も恐れており、森を失えばこの地の人々の暮らしも奪われる、と語っている。

違法伐採が激減した森でも、再び同じことが繰り返されないためにも、その地で暮らす人々、野生生物のその後にも目を向け続けたいと思う訪問となった。

## インドネシアからの違法材を 追う(6)-Sabah 違法材貿易続く

西岡良夫

2009年5月4日早朝、タワウ市のホテルから再度、カラバカンへ向かう。

今日のタクシー運転手はマレー語のみで、戸惑う。150リングットでインドネシア・東カリマンタンカリマンタン国境近くカラバカンへ行くと。途中のタワウ税関に寄れば、サラワク州一木材企業シンヤンのコンテナは少量だった。

「Kalabakan、サンプミ」と運転手は言う。

私はカラバカンにサンプミという別の企業があるのか、それも一考だと思い、乗り続けた。

カラバカンの方向からそれた道を行く。

これはどうもおかしい。ひよっとすれば、昨年4月に訪問し、インタビューしたフンニャブ製材所の隣りのカラバカン・プレイウッドに行くのかかと思いつつ、運転手に言わずに乗る。というのは、昨年行った際に、S林業との約束時間があつた、カラバカン・プレイウッドの聞取りを飛ばしたからだ。

労働者が全く来ない。

カラバカン・プレイウッド工場は朝7時から操業の筈だ。第1ゲート門番に入所許可を得て、同社に入る。門の横にある3つの寄宿舎からも労働者の姿が見えない。第2ゲートに来た。

何時から操業かと、門の労働者に聞いた。

「午前7時から午後6時か7時までだ。」

「労働者は非常に少ないが、カラバカン・プレイウッドは操業しているのか」とずばり訊く。



(写真)カラバカン・プレイウッド第2ゲート前

「今日も操業をしていないよ」と門番。

「ひよっとしたら、今年初めから操業停止となっているのですか」と、私は詳しく聞く。

「そうだ。今2009年1月から今も操業停止さ。でも俺たちは監視しなければならないし、状況を確認しなければならないので、働いている。」

実は09年1月末に木材関連で東カリマンタンの1企業を訪問した時、私はカラバカン・プレイウッドが操業を停止と再確認したんだが、。

とぼけて「何故操業停止なのか」と聞く。

「Log(丸太)が無いためだろう。詳しく知らないが、」と門番は詳しく説明するのをやめた。

「東カリマンタンからLogが運ばれていたのですか」と私。

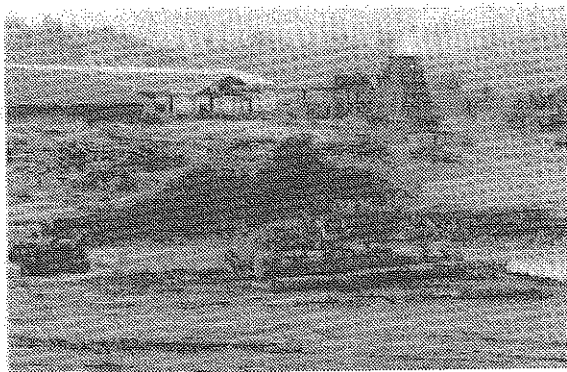
「多分そうと思うが、詳しく知らない」と門番。

工場の管理部の事務所が9時からでないとい開かないので、「テレマカン(有難う)」と言って、運転手にカラバカンに向かってほしいという。

運転手は「アトマジユ(Aturmajyu)ソウミルか。先に言ってもらえば、、、」と。再度値段の交渉。追加150リングットでOKと運転手。

車はスピードを上げ、カラバカン村へ。

分岐点で村に入り、カラバカン村のアトマジ



製材所が操業中と判る。工場から煙が出ていたからだ。

橋のたもとからタグボートが工場の方へ入り出すのがみえる。ちょうど1年前にアトマジュ製材所の管理者や労働者に聞き取りしたので、密輸について今回これ以上聞くのは困難だ。

私は運転手に「ホテルのチェックアウト時間が越える恐れがあり、今日ここに到着したのが遅いので、中に入らなくて良い。外から見ても判るから」と、身振りも交えて伝えた。

丸太の量は1年前に比べかなり少ないが、少量だが東カリマンタンからまたもやマレーシアの企業へと運んでいたのだ。何たることだ。

摘発するインドネシア警察や海軍の目を盗み、夜間に木材密輸を行っていたのだ！9割近くが停止して密輸停止に近づいたが、海路の全停止は難しい。



(写真・右と左／サバ州アトマジュ製材所)

アトマジュ製材所に木材が運ばれるから、カラバカン・プレイウッドも完全に操業停止しなかったのだろう。2年操業停止なら廃止だが、、、。

労働者の1人に聞く。

「あの木材はセラヤ(メランティ)の類か。」

「そうだ、セラヤ類のミックスだ。」

「どこから運ばれるのか」と私。

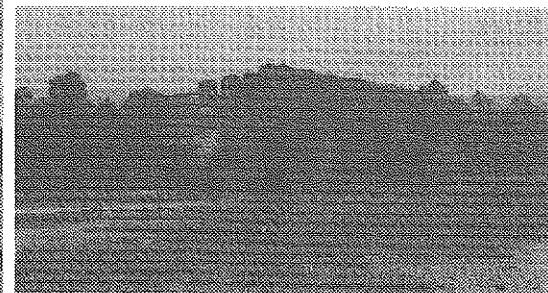
「詳しく知らないが、カリマンタンからとサバ州ラウムルング(Roumurong)だ」と。

運転手に戻ろうと伝えた。

坂を上がって、分岐点でインドネシアの国境の方の違う道から、アトマジュ製材所に向かう1台のトラックとすれ違った。

違法材取引は根絶していない。調査がまだ必要なのだ。

(最終回へ)



(写真・左アトマジュ製材所／上・同社へトラック)



## バスキとアブラヤシプランテーション ～タンジュンブティン国立公園より～

2009年 石崎 雄一郎

「森でずっと暮らしている男がいる」

その男の名はバスキ。

僕は、オランウータンのような人を想像していた。

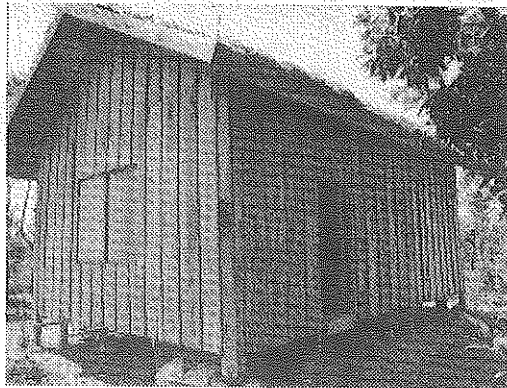
だが、初めて会ったバスキは、はにかんだような笑顔と控えめな話ぶりの好青年という印象だった。バスキは2か月に一回ほどしか町へ戻らない。生活の大半を森の中で生活している。12人兄弟の11番目の彼はジャワ島で生まれ、カリマンタン（ボルネオ）の大学に通った後、森の生活に入った。兄弟はみな街で暮らしていて、彼のことを変人だと思っている。

「森での生活は俺にとって Religion（宗教）なんだ」

彼は人が多くビルの建ち並ぶ街では生活したくないという。森の中で作物を植え、自給自足で暮らす。家は自分で建てた。都会が嫌いな彼だが人間嫌いでコミュニケーションが苦手というわけではない。

バスキの家はパームオイルプランテーションと森の境目にある。それには理由がある。

プランテーションの拡大はどんどん進み、河をはさんで国立公園の向こう側の土地はすべて無くなるうとしていた。バスキとその仲間は土地を買うことでプランテーションの侵略を防いでいるという。

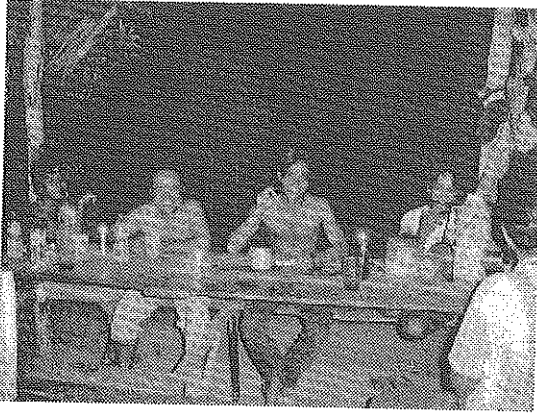


バスキの家

「どうやって土地を買ったんだ？」

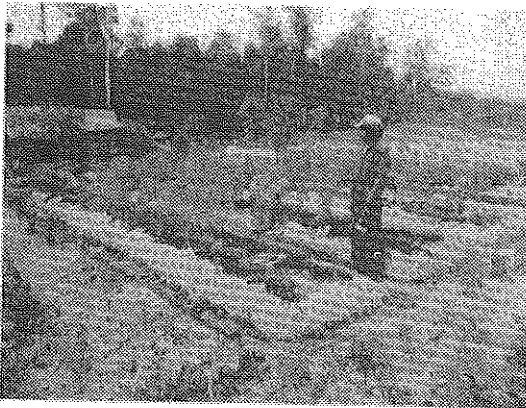
僕の質問にバスキは答える。

「もちろんお金なんてなかった。お金ならプランテーションの会社のほうがたくさんある。俺は土地を所有しているクマイの村の人へ何度もお願いをした。時には家へ呼んで一緒に食事をし、酒を飲みながら話をした。森が無くなるとうどうなるか、土地をアグロフォレストリーとして利用すればどんな利益があるか、プランテーションが村の人にとってどれだけ悪影響か、どうやって森を守っていくか・・・」



一番中央がバスキ

お金はないが土地を売ってくれないか?というバスキの頼みは受け入れられ彼は1haの土地を買った。足りないお金は親や姉が貸してくれた。そのように仲間と買っていった土地およそ30haが「FOREST FARMING (森林農耕) AT N.P.BUFFER.ZONE PROJECT」として進行している。



そこでさまざまな農作物や薬草、木の苗を作っている。写真に写っているのはタンジュンハラパンの住人。かつて彼も違法伐採などに携わっていたらしい。今はここに住み込み農作物を育てている。バスキは彼をこのプロジェクトのリーダーに育ててほしいと考えている。いずれは村全体を違法伐採、森の破壊から新しい農業への転換へ動かしたい。

バスキはいう。

「開発に対してStop!というのは簡単だ。だけどそれでは解決しない。村の人は貧しい。食べるためにはなんでもしようとする。それは仕方ないこと。そういう人にフレンドリーに、時には一緒に食事をしながら、時間をかけて何度も説明する。それはフラストレーションのかかる作業だけど一番有効なんだ。」時々プランテーションのオーナーが土地を売ってくれないか、と話をもちかけてくる。

答えはもちろん「NO!」だ。

実は帰国予定の日、国内便のLINUS航空がエンジントラブルのため欠航。

その日は現地NGOのYAYORINのオフィスに泊めてもらい、翌日3本の国内便を乗り継いで帰ることとなった。トラブルのあった日だが、YAYORINの広いオフィスに寝泊まりする何人ものスタッフに囲まれて運よく楽しい時間が過ごせた。

今回の旅ではたくさんの人に助けられ、結果的に人の温かさに触れた旅となった。

ジャカルタ空港の管制官アウディチャヤは「今度ジャカルタに遊びに来た時は連絡してくれ。案内するよ。なにかトラブルがあればいつでも言ってくれ!」と言ってくれた。

バスキは「僕の家に来てくれるなんてなんてHAPPYなんだ!」と言ってくれた。

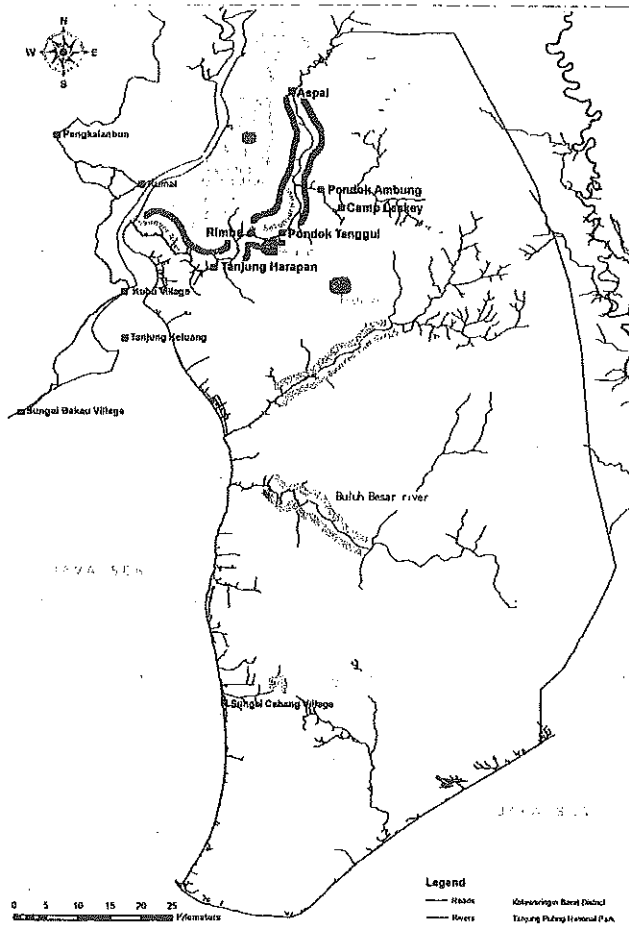
そして、YAYORINのスタッフは「飛行機トラブルがあったのは残念だが、そのおかげでこうしてあなたが私たちのオフィスに泊まってくれた。素晴らしいことだ」と言ってくれた。

大学生の時からNGOなどを通じ途上国と関わってきた。最近気づいたことがある。当初途上国、貧しい国に対して援助したいという気持ちでいたが、実際に行ってみてNGOの人や地元の人にかかわってみると、いかに彼らが優れたノウハウを知っているか、現地で培ってきた知識を持っているか、何をすべきかがわかっているか、そういったことが身にしみるのである。学ばされるのはいつも僕のほうだ。そんな彼らの頭の中にある面白いプロジェクトと日本にいる僕らがともに何かを成し遂げられるのならそれはとても素晴らしいことだと思う。



YAYORINのオフィス

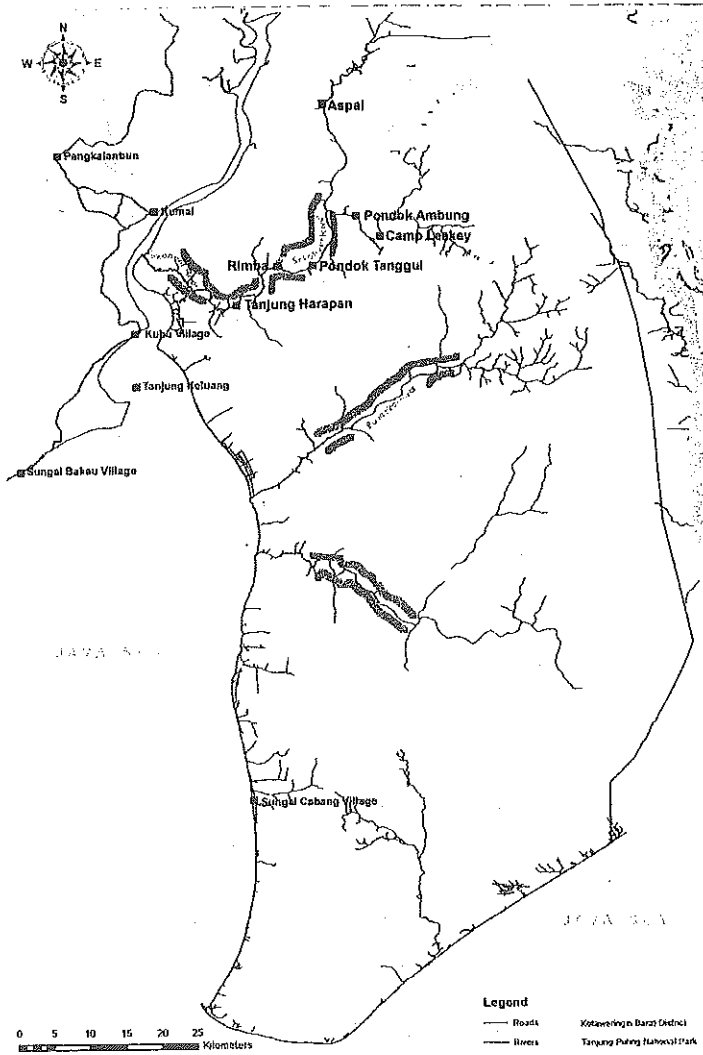
オランウータン生息状況聞き取り調査（2009年2月タンジュンブティン国立公園） Basuki 版



- 全
- ・Sekonyer 川のタンジュンブティン公園外側に 4 匹
  - ・Sekonyer 川のタンジュンブティン公園内側に 7 匹以上
  - ・Pesalat に 2 匹
  - ・五か月前にパームオイルプランテーションで一匹保護
  - ・Beguruh で一匹（野性かはわからない）
- 1年前
- ・Sekonyer 川のタンジュンブティン公園外側に 1 5 匹
  - ・Sekonyer 川のタンジュンブティン公園内側に 7 匹以上
  - ・Buluh kecil river に 2 匹
  - ・Buluh besar river に 2 匹
  - ・Pesalat に 2 匹
- 3年前
- ・Sungai Cabang Village でオランウータンがココナツ木を破壊しているのを保護

	Now	1 year ago	3years ago
Sekonyer(out) river	4	15	
Sekonyer(in) river	>7	>7	
Buluh kecil river	-	2	
Buluh Besar river	-	2	
Pesalat	2	2	
Palm oil Plantation	1	-	
Beguruh	1	-	
Sungai Cabang Village			1

オランウータン生息状況聞き取り調査（2009年2月タンジュンプティン国立公園）・・・Arbi 版



・Sekonyer river は2008年12月、上流で砂金採取が1000人規模で行われたためにオランウータンが避難  
 ・2年前から違法伐採が終わって戻ってきた  
 ・4月にカリマンタン全土でオランウータンの大規模調査を実施予定  
 ・Palm Oil Plantation がタンジュンプティン公園内に迫ってきていたが National Park のボーダーに Jeltung & rubber tree を植えたことにより、違法伐採が入れなくなった。

	Now	before
Sekonyer river	Not so many	Not so many
Buluh kecil river	A lot	A lot
Buluh Besar river	A lot	A lot
Pos 51	A few	A few
Sungai Sigintung	A few	A few

**【APP社の森林破壊でトラ等が生存の危機】**

世界有数の製紙企業 APP(アジア・パルプアンドペーパー)社は、インドネシアのスマトラ島で大規模の原生林等破壊を計画しているとWWFインドネシア等のNGOsが5月18日に報告。WWF等によればジャンビ州プキ・ティガブル国立公園周辺に残る自然林の大半をシナルマス・グループのAPP社他関連企業が皆伐する許可を取得と、100頭近いオランウータンだけでなく、数少ないトラや野生生物等も生存の危機に直面している。(資料:WWF、FoEJapan等)

**【ブラジル、投資家等へ土地保有権法を承認】**

6月末にブラジル大統領は、100万ha以下の土地所有者に安価で買い取る土地保有法調印。6700万haのアマゾンの熱帯林を100万人以上の不法移住者、投機家に与える保有法になる。支持派は土地保有権を認めると歓迎し、環境保護団体は違法住民や投機家が占有を合法化し、森林破壊や森林犯罪の悪化を進めると。7月12日にパラ州で連邦検察の調査で、違法木材であるのに「エコ証明の木材」と偽装し米国、EU等に輸出と。偽装エコ木材の関連企業は3千社以上に及ぶ。(資料:Mongabay News 6/29,7/12)

**【森林破壊でマレーシア先住民、再道路封鎖】**

8月初旬、マレーシア・サラワク州先住民のブナン人は Samling Timber 等の原生林破壊に抗し、バラム川上流域のロング・バンガン等の数箇所で再度の道路封鎖。住民は生活を破壊しないようサムリン木材社に申入れも無視され抗議と。ブルーノ・マンサ・ファンドによれば、同社はガイアナ等で違法伐採も実施と。(BMF 8/24)

**【インド最高裁、森林回復へ23億ドル拠出】**

7月、インド最高裁は森林回復や野生生物保全へ凍結の23億ドルを拠出すると決定。この資金で約600万haの森林を回復できる可能性があると同国環境大臣が発表。(ロイター7/19)

**【木材輸入協会調査、合法合板83%に上昇】**

日本木材輸入協会は、平成20年度の合法性・持続可能性の証明された木材・木製品の取扱を発表。輸入合板は合法性の証明が83.3%、製材や集成材では31.4%と。当会では原産地確認無し日本企業が多数で、特にサラワク州産合板は大半が持続可能性を欠く原生林材で、一部は違法の木材と推計。昨年度より数段良くなったが、丸太等の商品につき、再考も必要。

**【合法・持続可能性の証明された木材・木製品のH20年度の取扱量】 単位:m<sup>3</sup>**

	申告輸入量	合法材数量	比率
丸太	3,697,246	728,558	19.7
製材	2,574,724	70,161	2.7
合板・ボード	2,570,225	2,141,635	83.3
集成材	563,168	14,255	2.5
合計	9,403,393	2,954,609	31.4

(資料:木材新聞)

**【民主党で森林政策が変わるか?】**

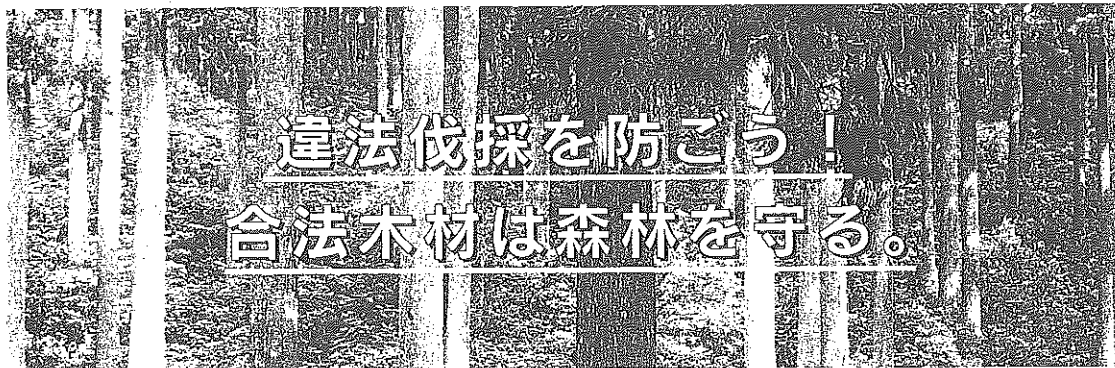
民主党マニフェストでは、①森林管理・環境保全直接支払制度導入による森林吸収源対策の実施で削減目標とする、②違法材対策は外材輸入に適正な木材であることを証明するトレサビリティ(追跡可能性)システムの導入で規制、③木質バイオマスの更なる活用、④国有林野事業の抜本見直し等が目玉。(民主資料等より)

**【国産杉型枠合板、林野庁積極推進へ】**

国産材型枠を使用の自治体は8府県で、現在国産型枠材使用の問題は曲げ剛性、塗装等へ改良等。国産合板材が10%弱で、サラワク産等が9割の輸入合板で違法性や持続可能性が低い木材は転換が必要。林野庁は国産型枠を利用の方針と。(木材新聞9/3 林野庁HP等)

**【林野庁H22年度予算4432億円の概算要求】**

林野庁22年度要求の重点は、多様で健全な森林整備、林業産業・山村再生。(林野HPより)



# 違法伐採を防ごう！ 合法木材は森林を守る。



○合法木材を使いましょう！

地球上で進行している森林減少の原因の一つとして違法伐採の問題があります。

日本政府は、三年前から合法性などが証明された木材・木材製品（合法木材）の優先購入に取り組み始め、木材業界は合法木材の供給ができるように体制を整えています。

合法木材を利用した住宅や公共建築物、家具・文具などの木材製品を積極的に使用することは森林を守る大きな力になります。

○九州における合法木材の取組  
九州山地を中心とした九州の森林が果たす水源の涵養、自然環境の保全、木材供給など多面的な機能は、県境を越えて恩恵をもたらすものです。

これらを十分に発揮させるため、「九州は一つ」の理念のもと、各県が連携し、森林を保全、活用する方策を推進させるため、平成二十年五月各県知事並びに九州森林管理局長により「九州の森林づくりに関する共同宣言」が採択・調印されました。



調印式の様子

この宣言の行動方針の一つとして、合法木材の流通促進とグリーン購入の促進について、九州統一の共通推進方針を定め、平成二十一年度から九州各県が歩調を合わせ、合法木材調達目標を一〇〇％

に設定し、今後のさらなる流通促進を図ってまいります。

○平成二十一年度長崎県環境物品調達方針

平成二十一年度から、別表の品目が合法木材調達目標一〇〇％に設定されました。

合法木材の普及推進にご協力を  
お願いいたします。

(林務課 普及林産班 富田 浩文)

【別表】H21年度長崎県環境物品等調達方針(抜粋)

特定調達品目	分類	品目名	
		(品目分類)	(品目名)
公共工事	資材	製材等	製材
			集成材
			合板
			単板積層材
		フローリング	フローリング

# HUTAN ACTION SCHEDULE

11月14日午後 6:30-8:30 主催:ウータン・森と生活を考える会

『オランウータンがすすめる森作りと泥炭湿地林保全を…』

インドネシアからのメッセージ』大阪集会

場所:ドーンセンター Tel)06-6910-8500(地下鉄・京阪天満橋駅から東へ5分)

講演 \* Nyoman 氏(ニョマン/ Wetland International Indonesia ポゴール)

Basuki 氏(バスキ/ Friends of National Parks Foundation 中カリマンタン)

Togu Manurung 氏(トグ・マヌルン/ Forest Watch Indonesia/林業大臣相談役)

違法材停止が広がるインドネシアで今までの取組み、野生のオランウータンが棲める森作りや泥炭湿地保護を目指し温暖化防止の取組み、今後のインドネシアの森林保護等うれしい話題!

11月12日 P2:00-5:30, 6:30-8:30 連続セミナー「人々の生物多様性」第3回

特別セッション『消える熱帯林はどこへ? インドネシアから日本へのメッセージ』東京

主催 \* FoEJapan、(財)地球・人間環境フォーラム、熱帯林行動ネットワーク、RAN Japan

ウータン・森と生活を考える会、メコン・ウオッチ 後援:林野庁など 参加費 1000円

場所:総評会館/03-3253-1771(都営地下鉄新宿線小川町から北2分、JR御茶ノ水駅から南5分)

講演 \* WWF インドネシア、スマトラ島 NGO, Friends of Parks Foundation のバスキ

氏, Wetland International インドネシアのニョマン氏, FWI のトグ・マヌルン氏 他

原生林破壊の紙生産、泥炭湿地保護、オランウータンの森作り、今後のインドネシア森林保護

《会費、カンパ、切手カンパを頂いた方々》(2009年6月23日~9月24日)

(敬称略)

伊藤哲男 尾崎由嘉 岡本昭子 春日直樹 春日淳一 木村久吉 小林圭二 田中順子  
辻垣正彦 寺川庄蔵 服部隆志 蓮原耕児

(ありがとうございました)

いつもご支援いただきまして、ありがとうございます。領収証は発行していませんが、ご入用の時はお申し出下さい。よろしくお願い致します。

## ウータン・森と生活を考える会



[OFFICE] 〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel.06-6372-1561

(HP [www.hutang.org/](http://www.hutang.org/) / (mail) [fwpc3808@mb.infoweb.ne.jp](mailto:fwpc3808@mb.infoweb.ne.jp))

【一部】300円 【年会費】4000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。